

ハグルマのイチ

作：風見緑哉

【あらすじ】

「ハグルマ」と呼ばれる高度な知性と感情を持った生物が数多く住んでいる星が舞台。地面から湧き出る希少金属を加工したものがハグルマの身体をつくる原料・食料であり、希少金属は一つの場所から一定に湧き出るものではないため、地上を移動採集しながら生活している。より早く移動するためにハグルマ同士の歯を組み合わせる動力にする「トキカイ」と呼ばれる群れを作るハグルマたちも数多くいて、いかに大きいトキカイの一部になれるかが重要視されていた。

大きなトキカイのハグルマのひとつである主人公イチは、与えられた仕事に満足しながらもどこか退屈を感じていた。そんなとき、イチの所属する左後脚部署の先輩でイチ自身も尊敬しているリーダー・ユヲの将来の夢を知る。君の夢は何かと問われたイチは答えることができず、自分はここで何がしたいのかを考え始める。

ユヲは自分の夢を叶えるため歯の改造を行なっていたが、ある日改造が原因でトキカイに不良動作が起こる。外から整備士カイと呼ばれる黒い巨大生物がユヲの改造を確認すると、躊躇いもなく外に棄てた。個性を持ったハグルマの末路を思い知らされたイチは生き方に悩み、古株のニムに相談すると、トキカイに残るためには自己主張をしないことだと教えられる。

ユヲの代わりに配置された新しいハグルマのノツは、優秀だが協調性がなく同じ部署の仲間に無理を強いた。トキカイの性能は上がったものの、オーバーワークが原因で古株のニムにヒビが入り2つめの仲間を失うことになる

長くトキカイを支えて来たハグルマでさえ、都合が悪くなればすぐに棄てられる事実、本当にハグルマの幸せは大きなトキカイの一部になることにあるのかイチは疑問を覚え始める。

そんな時、一つの事件が起こる。巨大トキカイ同士が衝突し、衝撃でイチのいる左後脚が本体から分離する。分離した脚の近くに直に触れると凝固してしまう希少金属が湧き出し、左脚にいるハグルマの力を総動員して逃げ切ろうと試みるが金属の流れが早く巻き込まれる寸前でイチの機転により回避する。安心もつかの間さらに希少金属は迫り、今度はノツのリーダーシップによって回避できるかと思われたものの、逃げ切れず巻き込まれる寸前で、イチの決死の行動により難を逃れ、整備士カイによって救われた。

この事件を機に、イチは自らのやりたいことを見つけるが普段の生活では叶えることができない。その時、壊されてしまったと思っていたユヲが彼の夢だった飛行トキカイにニムを乗せて戻って来た。君の夢は何かともう一度問うと、イチは笑って言った

「私はハグルマのイチ、進む方向は自分で決められるハグルマになりたい」

【登場人物紹介】

イチ

小柄な若いハグルマ。初めて乗った大型トキカイの左後脚部署に配属され換気扇回しを担当している仕事内容に満足はしているが最近若干の退屈を覚え始めた。真面目だが、どこか抜けている性格
円盤の歯の一部が欠けていることをコンプレックスにしている、トキカイで働くことで報酬としてもらえる希少金属を少しずつ貯金し、いつか歯の修復を行おうと考えている
大型トキカイの一部になれたことで満足していて、自分がそこで何をしたいのか考えたこともなかった

ユヲ

背が高く円盤も大きい若いハグルマ。左後脚部署の動力の要となるリーダーで、イチの先輩
優しく面白い性格から、部署のハグルマたちからの人望も厚い。イチが初めてトキカイに配置された時に回り方や、他のハグルマとの歯の合わせ方、歯のメンテナンスなどを教えてくれた先輩であり、イチも尊敬している。飛行するトキカイの一部になることが昔からの夢で、
飛行トキカイ用に自身の歯を改造するなど自分磨きを欠かさない

ニム

厚みのある円盤を持つ老年のハグルマ。長年大型トキカイで裏方を務めている。左後脚部署では一番の古株である。安定が一番であり、ただ回っているだけで住むところも食べるものも与えられる大型トキカイにいられることが幸せだと感じている。極力目立たないように自己主張をせず生きている
自分の夢などとうの昔に忘れたと言ってしまうなど、どこか哀愁が漂う佇まいだが、イチの相談に親身に乗るなど優しい一面も持っている

ノツ

綺麗に磨かれたシャープな円盤を持つ若いハグルマ。ユヲの代わりに整備士のカイが連れて来たイチのいるトキカイに来る前も大型のトキカイで活躍していたようで、見た目に反して動力はユヲ以上にある。攻撃的な性格で、自分以外のハグルマたちを見下していて、全て命令口調で指示を出す
円盤が汚れるのを極端に嫌うなど潔癖の一面もある

整備士のカイ

トキカイが引く轎に乗る黒い大型の生物。顔には白く光る目に白い髭がある。円盤がないことからハグルマではないと思われるが真相は不明。イチの乗るトキカイのハグルマの間では整備士のカイと呼ばれていて不良動作を直してくれる反面、容赦なくハグルマを外に捨てるなど恐れられている存在

ハグルマのイチ プロット 1

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという生物が暮らす星	ハグルマのイチ	トキカイの中で起こるハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード	主人公の気持ち
起 エピソード数 (1)個	①主人公イチと世界観紹介エピソード たくさんのハグルマたちが横や奥に重なり合うようにしてゆっくりと回っている その中の一つのハグルマ(名前:イチ)がクローズアップされる イチは瞑っていた目を虚ろに開き考え事をしている イチや多くのハグルマを内包する、ゴツゴツとした大きな一つの生物のようにも見えるトキカイが、乾いた地面を四つ足でゆっくりと歩いている 周りには大小様々な他のトキカイも同じように歩いていて、一つとして同じ形のものはない 空中を飛ぶトキカイもいる トキカイの足元には群を作らないハグルマも数多くいて自らの歯を使って回転しながら進んでいる 全てのハグルマやトキカイは丸い星の地面を歩き続けている 地面から時々湧き出るハグルマの身体の原料となる希少金属を集めながら進む ハグルマが集まって生み出される新しいトキカイもあれば、 途中で分裂するトキカイ、壊れて動かなくなってしまうトキカイもある ハグルマたちは自分の意志でどのトキカイの一部になるか、自分で進むかを 決めることができる より大きなトキカイの一部になることでより早く移動し 希少金属をより多く集めることができると信じられており、いかに大きなトキカイ の一部になれるかが最近のハグルマたちにとっては重要なことだった ハグルマとトキカイたちの歩く星の全体図が見える	私はなんのために ここにいるのか
承 エピソード数 (3)個	①イチの仕事への思いと先輩のユヲとニム ゆっくりと同じ方向に回転し続けるイチ 隣にも奥にも大小様々なハグルマたちが背中の歯を噛み合わせながら回っている イチの歯の先には他のハグルマの代わりに長い棒が噛み合わさっており、 棒はハグルマが配置されている部屋を冷却するための送風機を回している ハグルマたちは回転していると自然と熱くなってきてしまうため、温度が上がりすぎ ないように冷やすための送風機を回すのがイチの仕事 イチは最近この仕事に僅かな退屈を覚え始めていた。 嫌いな仕事ではないし、部署のハグルマたちから感謝されるためやりがいもある ただ、直接トキカイの動力になる他のハグルマと比べ目立たない仕事であることは 事実であり、歯が一部欠けているため他のハグルマとうまく噛みあえない コンプレックスも抱えていた イチは仕事に対する悩みが贅沢なものであることは頭では理解していた なぜなら乗っているのはひとときわ大きい有名なトキカイであり、ハグルマたちの 憧れだったからだ イチの斜め横前で回転している二回りほど大きいユヲが、悩んでいそうな イチの顔をみて気さくに話しかける ユヲはイチの先輩で、イチたちが乗っているトキカイの左後脚を動かす部署 の要になる重要な役割を担うリーダー的な存在である イチが初めてトキカイに配置された時に、回り方や他のハグルマとの歯の合わせ方、 歯のメンテナンスの仕方などを優しく教えてくれた先輩であり、部署の仲間からも 信頼が厚く、イチも尊敬していた	仕事は楽しいが 少し退屈でもある そんな贅沢を 言うべきではない

ハグルマのイチ プロット 2

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという 生物が暮らす星	ハグルマ のイチ	トキカイの中で起こる ハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に 自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード	主人公の気持ち
承 エピソード数 (3)個	イチはユヲに退屈なのを見抜かれたかと焦って仕事を頑張っているアピールをするとユヲは笑って応援してくれた その時後ろから声が聞こえ、ニムが会話に入ってくる ニムは左後脚部署の一番の古株である イチ・ユヲ・ニムの雑談 鐘が鳴る 時を刻むハグルマたちが回転をやめ 1日の仕事終了しトキカイがその場で脚を折りたたみ停止する 停止している間はハグルマたちにとって自由時間である トキカイの外に出ることもでき、各々が自由に過ごす 多くのハグルマたちはトキカイの腹部にある自室に戻っていく 普段は個別のイチ・ユヲ・ニムと一緒に食事をとった ハグルマの食事は希少金属を採取した時に一緒に採れる金属片である ユヲが自分の夢を語る 本当は飛行するトキカイの一部になりたかった 夢は諦めておらず、もっと動力をうまく脚に伝えられるように成長したら 飛行するトキカイに移動したいと言う 話を聞いてニムは夢なんてとうの昔に忘れたという ここでは何も考えずただ同じように回っているだけで食べるものも住む場所も 安定して与えられるからここにいれるだけで幸せだと言った イチにユヲがなぜこのトキカイを選んだのか、イチの夢を問う イチは答えることができなかった 大型トキカイの一部になることが夢であり、その後どうするかなど考えたこともなかった ただ、一つ目標はありトキカイの中で働くことで数滴ずつ報酬としてもらえる ハグルマの身体を構成する希少な金属を少しずつ貯金し、欠けた部分に歯を継ぎ足す のがイチの当面の目標だった。左後脚部署に配置されてからすでに星半周が経っており 目標の貯金量は達成間近である。 食事を済ませ自室に戻ったあとイチは自分の夢について考える 自分はここで何がしたいのか自分自身でわからない 分かっているユヲを羨ましく思った 次の日からユヲの様子が少し変わった 夢を話してからユヲは自分自身で 歯の改造を少しずつしているらしく嬉しそうな表情でイチとニムに自慢をした ニムはそんなユヲをみて、あまり自己改造しすぎるとここにいられなくなると警告する ユヲはその言葉を軽く流した ②夢を追い求めたユヲの末路と整備士カイ 数日後、ユヲの自己改造は目に見えてエスカレートしてきた 本人は今まで以上に生き生きとしていて、イチはそんなユヲの姿を カッコいいと思いつつも、どこか違和感を感じていた 時を刻むハグルマが回り始め、鐘の合図が1日の始まりを告げる	左後脚部署 の先輩は 優しい 夢なんて 持ってい もののなか そういえば ここで何を したいのか 分らない やりたいこと が分かって いるユヲは 羨ましい やりたいこと が分かって いるユヲは 羨ましい が心配でもある

ハグルマのイチ プロット 3

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという 生物が暮らす星	ハグルマ のイチ	トキカイの中で起こる ハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に 自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード	主人公の気持ち
承 エピソード数 (3)個	トキカイが立ち上がろうとすると、左後脚だけがガクンと一拍遅れて上に上がった左後脚部署のハグルマたちは、突然の衝撃に驚き悲鳴をあげる 普段ならすぐに動き出すはずのトキカイがその場で一時停止し、不快な警報音が鳴り響く トキカイの左後脚部分の外装が大きく開き、中のハグルマたちからも外の景色が見える状態になった 強風を肌で感じたイチは今まで感じたことのない恐怖感を覚える 他のハグルマたちも怯えている 突然大きな黒い物体が外側から左後脚部署を覗き込む 黒く大きな頭に白く光る目と白い髭のようなもので覆われた物体は、何かを確認するようにゆっくりとハグルマたちを観察していく 「整備士カイが来た・・・」 そう呟いたニムは身体を縮こまらせ、整備士と目が合わないようには震えながら目を閉じる やがてイチとユヲとニムが正面に見える位置に瞳がくると整備士カイは動きを止めた 吸い込まれそうな白い瞳にじっと見つめられたイチは恐怖が永遠に続くのではないかと錯覚した 整備士カイの黒く大きな親指と人差指が左後脚部署の中に入ってくる 指はイチの方にまっすぐ向かって来ていたため、イチは思わず目を瞑る 指は斜め前にいるユヲの歯を摘んだ 状況を察したユヲは、振り向いて目があったイチに向かって 「君も夢が見つかるといいな」と笑顔で言った 整備士カイはユヲを摘んだ指を瞳の近くまで持ってくると、くるくると前後左右に回して何かを確認する 突然、整備士カイの指はユヲを外へ投げ棄てた 宙を舞うユヲの姿はスローモーションに見え、落下するまま外の地面に叩きつけられ動かなくなった イチは時間が止まったような錯覚をおこした 何が起こったのか理解できなかった ただ呆然と吸い込まれそうな白い瞳を見ていると、整備士カイが感情を込めることなく 「トキカイのハグルマにコセイなどイラナイ、フリオウドウサのゲンインだ」と言った 限りなく低い声はトキカイの表面を震わせるほどのものだった 整備士カイは慣れた手つきでユヲがいなくなった部分を補うため左後脚部署のハグルマたちを組み替えると、正常に回ることを確認し外装を閉じた トキカイはいつもと同じように動き出し、ハグルマたちもいつも通りゆっくり回り始める ほんのわずかな時間だが、イチにとって忘れることのできない衝撃的な出来事になった ユヲが棄てられた日、左後脚部署では誰も一言も話すことなく重苦しい空気が流れた 仕事が終わリ、イチは個でいるのが不安でニムに声をかけて一緒に食事をしながら ユヲのように個性や夢を持った生き方が悪いものなのかを相談した このトキカイへの従事歴の長いニムはいままで何回か整備士カイをみたことがあり、 トキカイに害を与えそうなハグルマや壊れそうなハグルマはすぐに整備士カイによって 外に棄てられる その後のハグルマたちの行方は分からないと言った	怖い 何か 悪いこと をしたのか 現実のこと なのか 信じられない 現実のこと なのか 信じられない 夢を持つことが 悪いことなのか 分からない

ハグルマのイチ プロット 4

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという 生物が暮らす星	ハグルマ のイチ	トキカイの中で起こる ハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に 自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード		主人公の気持ち
承 エピソード数 (3)個	トキカイに長く使われるためには目立たず、逆らわず、ハグルマの回転を乱さないように 回り続けなければいいとニムに教えられた その言葉を聞いてさらにイチは悩んだ ③新人のノツとハグルマたちの軋轢 次の日、始業の鐘の合図がなるとすぐに外装が開いた 整備士は新たなハグルマをユヲが元いた部分に付け替えて、その右隣にイチを並べる 磨き抜かれた綺麗な歯を持ったハグルマだがどこか冷たそうな雰囲気だった 他の大型トキカイから性能の良さを買われて整備士に連れてこられた ノツと名乗ったハグルマはこれから同僚になる左後脚部署のハグルマたちに 向かってただ一言「わたしの邪魔だけはするな」と言った ユヲの代わりに配置された新しいハグルマのノツは、優秀な性能を持っているものの、 協調性がなく同じ部署のハグルマ達に無理を強いた。 トキカイの性能も向上し整備士カイは喜ぶが、部署のハグルマ達は疲弊していき、 ついに古株のニムの円盤にヒビが入る。 整備員カイに見つかったら確実に棄てられると怯えるニムの本音をイチが聞くと、 安定は幸せ、でも退屈だったと答えた。 次の日ニムは整備士カイによって外に棄てられヒビの部分から真二つに割れた。 長くトキカイを支えて来たハグルマでさえ、都合が悪くなればすぐに 棄てられる事実、本当にハグルマの幸せは大きなトキカイの一部になることに あるのかイチは疑問を覚え始める。		夢をもったら ユヲのように 棄てられる かもしれない ユヲとは 全然違う 平和に仕事 できる 自身がない ついていくの が精一杯 だけど 学べる部分 も多い ニムが心配 やはりニムも 退屈を感じて いたのか 本当にトキカイ にすることが 幸せなのか
	転 エピソード数 (2)個 ①トキカイ衝突事件とイチの行動 とある事件によってイチは自分を見つめ直すことになる いつも通りのある日のこと、トキカイの右横から轟音が聞こえたと同時に金属の 擦れる不快な音があたり一面に鳴り響いた 普段ほとんど衝突することのない巨大トキカイ同士が強風に煽られて衝突し、 衝撃で接続が弱くなっていた左後脚が本体から分離し、本体から少し離れた ところまで飛ばされた 左後脚部署のハグルマたちは奇跡的に全て無事だったが 本体のところに戻るまで時間がかかりそうな距離である 1 本脚を失い自身の重さでバランスを崩したトキカイはその場で停止し、 整備士カイは本体が倒れないよう対応に追われる 本体から外れてもハグルマたちは独自に回転運動ができるため、 左後脚部署のハグルマは力を合わせて脚が横倒しにないように本体の方に少しずつ 移動するが、突然近くで希少金属が湧き出す。 熱を加えないままの希少金属に触れると金属が凝固してしまうため、熱加工していない 希少金属に触れてはいけないのは誰もが知っている常識だった。 このままの速度だと希少金属に左後脚が飲み込まれてしまう。もっと早く動けないかと イチは動力の要であるノツに迫るが全力でやっていると返される。		何が起こった のか分から ない 早くもどらな ければ 早くもどらな ければ! 方法を考え ないと

ハグルマのイチ プロット 5

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという生物が暮らす星	ハグルマのイチ	トキカイの中で起こるハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード	主人公の気持ち
転 エピソード数 (2)個	ノツの回転は早い、その回転速度に他の歯車がついてこれず上手く動力を全体に伝えられていない イチは外に顔を出し、希少金属が流れ進む方向を確認すると、横に進路を変えれば金属を避けられるかもしれないと提案する。進路を変えるなど到底無理だとノツは言うが、イチが足の向きを確認し、足の関節を動かしているハグルマとハグルマの間に無理矢理斜めに挟まった 左後脚全体が大きく傾きハグルマたちは悲鳴を上げるが、ほんの少しだけ足の向いている角度が変わる 向きを確認し、斜めに挟まるのを繰り返すと左後脚は横方向に進み始めた 希少金属はさっきまで左後脚が進んでいたルートを侵食していった ②左後脚部署の共闘とイチの気づき 左後脚部署だけで力を合わせて希少金属を回避できたことにハグルマたちは歓喜する イチの必死な姿をみたノツが、イチがいなかったらきっと今頃は希少金属に飲まれていただろうとお礼を言った。 イチは驚いて照れ隠しするが、安心もつかの間、外の様子をみていたハグルマが後ろと左横からまた希少金属が迫って来ていると知らせる いままで命令しかしてこなかったノツが部署のハグルマたちに力を貸して欲しいと頭を下げる　ハグルマたちは困惑するものの、ノツを励ましリーダーについていくと言った ノツは最大の動力を出すために散らばっていたハグルマを一箇所にまとめて並び替え、ノツの回転速度を最大限に他のハグルマに伝えられるように配置した ハグルマたちは必死に回り続け、歯が熱ですり減るもの意に介さず今出せる最大の速さで進んだ だが希少金属の進む速さは予想以上に早く、少ししたら確実に左の足元に触れてしまうと確認しているハグルマが伝える イチは一度ハグルマたちの回転から抜けさせてもらおうと、外の様子を確認し、左後脚と本体を繋いでいた弾力のある長い紐の先端に、取り外した重い換気扇を取り付けた いつも回している換気扇のため扱い方はよくわかっている 自らも別の紐を体に巻きつけて、左後脚の内側の縁に足をかける 一瞬怯んで後ずさりをした　なぜこのようなことを自分でしているのか分からない この方法であればうまく進路変更できる気がしていた 生きて帰れる保証はないが試してみたいと思う自分がいることにイチは自分自身で驚いた そしてイチは外に身を投げた。振り子のように換気扇を希少金属の中に落とす。 希少金属の中で固まった換気扇が軸となり前に進もうとする力と相反して紐が強く引っ張られて脚全体が右に大きく傾いた さらにイチが紐の一部を体に巻きつけて高速回転し、紐の張りを最大限まで高める	方向を変えればいける気がする 成功した! 嬉しい 喜んで いる場合 じゃなかった 全力で協力 します 逃げ切れー!!! !!! 今度も いける 予感が する 大丈夫 いける! いけー!

ハグルマのイチ プロット 6

ストーリー 設定	いつ(時)	どこで(場所)	だれが(主人公)	何をする話なのか	なぜそれをするのか
	未来	ハグルマという生物が暮らす星	ハグルマのイチ	トキカイの中で起こるハグルマの問題を解決する	イチが問題解決を通して本当に自分がやりたいことを発見する

起承転結	エピソード	主人公の気持ち
転 エピソード数 (2)個	左後脚のかかとを軸に足が宙に浮き、足の下スレスレを希少金属が流れていった 紐が切れ、反動で飛ばされたイチは、自分にできることはやりきったと希少金属をギリギリ避けて横に倒れていく左後脚を笑顔で見送った 希少金属の海に向かって落ちていくイチ。いままで感じたことのないような達成感を感じながら、自分のやりたかったことは自由に思った方向に進んでいくことだったと気付く でももう遅いと目をつむると、宙に浮いたイチの体を大きな黒い手が受け止めた もう片手で左後脚を拾い上げると、整備士カイは立ち上がり本体の元へ戻っていく イチは驚いて手の上から整備士カイを見上げるとトキカイの中から見るよりずっと巨大な黒い生物がイチを見て目を細め「アリガトウ」と言った まもなく左後脚は整備士カイによって無事に本体と接続され、普段と変わらない日常が戻った	成功だー! こんなに嬉しいこといままでもなかった 自由に思った方向に動かしてみたかったんだ 普通に助かった・・・?
結 エピソード数 (1)個	①衝突事件終了後の日常 衝突事件から数日が経ち、イチはまた僅かな退屈を感じていた。 横倒しになった時、欠けてしまったトキカイの外装を透明な素材で補ったため外の景色が見えるようになったが、イチの外を自由に動き回りたい気持ちをさらに強くするだけだった。 ノツは前よりも部署の仲間を思いやるようになり、他のハグルマ達の意見も聞くようになった ノツ自身の性能は本来高いため、他のハグルマとの噛み合わせさえ問題なくなれば、より高い動力効果を発揮できるのではないかと思えた 何も無い普通の日も幸せだとイチは回っていると、外からイチを呼ぶ声に気付く。 イチは驚いて声のする方を向くと小さなプロペラを回しながら飛ぶ飛行トキカイの横でユヲが回りながら手を振っていた。 飛行トキカイの上には2つに割れたはずのニムの姿もあり、片方ずつ別の役割に使われている。ニムもイチに向かって手を振った。 ユヲもニムも壊れてしまったものだと思い込んでいたイチは、驚きと喜びが込み上げ大きく手を振った。一日の終わりに、ユヲとニムの乗るトキカイのところに行く。 左後脚の調整後、整備士カイがユヲを拾い直しユヲの希望を聞き入れ新しく飛行するトキカイを組み上げてくれたとのことだった。整備士カイはトキカイ内部の調和に関しては厳しいものの、ハグルマたちには友好的で、少し変わったハグルマを集めてそのハグルマに合わせた新しいトキカイを数多く生み出しているらしい。 ニムはユヲの顔見知りということで、新しいトキカイにそのまま乗せてもらった ユヲはイチに「夢はみつかった?」と尋ねる。イチは大きく頷きこう答える「私はハグルマのイチ、進む方向は自分で決められるハグルマになりたい!」	平和だけど退屈 外を自由に動き回ってみたい また会えるなんて奇跡みたい! 私も夢を見つけた!
	終	

【世界観】

地球と似ているようで似ていない星

この星には『ハグルマ』と呼ばれる生物が数多く住んでおり、ハグルマたちは群を作って移動生活をしている

たまに地面から湧き出る希少金属がハグルマの身体をつくる原料となり、希少金属を集めながら生活する

ハグルマは高度な知性と感情を持ち、お互いに助け合いながら短い命を繋いでいく

複数のハグルマが一箇所に集まり、一つの大きな塊になったものを『トキカイ』と呼ぶ

ハグルマ達が組み合わさって回ることによってトキカイを動かす動力になる

トキカイの一部になることで、より早く前に進み希少金属も安定して手に入れることができると

ハグルマの中では信じられており、いかに大きなトキカイの一部になれるかがハグルマにとっては重要であった

ハグルマの生態

ハグルマは地中から採れる希少な素材を、ハグルマ自身からとった型の中に流し込み固めて生成される

タイトル・ストーリーに登場する名前について

ハグルマのイチ → イチという名前を ハグルマのうちの一つ・ハグルマの位置の二つの意味にかけている

イチ / ユヲ / ニム / ノツ / カイ → ユ イ イ ツ ム ニ ノ カ チ ヲ

トキカイ(渡機械 / 時買い) → 星を進んでいくための機械
進むためにハグルマたちの時を買うという意味もある
一方向のみに進む「時」のイメージ
造形イメージはトナカイ